

All imperfect love song is over
long long time ago



著 / 秋山真琴
繪 / 遙彼方

All imperfect love song is over.

「そろそろ終わりにした方がよろしいのではないですか」

口髭を生やしたマスターにそう言われ、おれはようやく視線をカウンターに並んだ七つのピンから逸らすことができた。

頭が痛かった。

そもそもマティーニはこのようにして飲むものではないのだ。味なんていうものも三杯目の頃から分からなくなり、オリーブの味だって五杯目には失われていた。

どうしてこんな飲み方をしたのだろうか。

差し出された水を飲みながら、おれは記憶を反芻する。

そうだ。ああ、そうだ。

吊い酒のつもりだったのだ。結婚しようとして約束していた、麻子に対する。

おれは彼女の面影を思いだし、また泣きそうになってしまう。彼女は今のおれの味覚なんてものよりも、より絶対的に、恒久的に失われてしまったのだ。もう二度と、よみがえらない。夜が明け、雨が上がり、冬が終わろうとも、おれは二度と彼女をこの手で抱きしめることができないのだ。永遠に。

寒気を覚えたので、おれはコートに袖を通すことにした。

おや？

いつの間にかおれはバーを出ていた。道理で寒いわけだ。支払いはちゃんと済ませたのだろうか。財布を取りだして、中身を確認したが減っている様子はない。勘定を済ませることができないぐらいに酩酊していたのだとすると、きっとあのマスターのことだ、「請求は次に訪れたときで構いませんよ」と気を遣ってくれたのかもしれない。

いや、そうだとすると、今のおれはタクシーに乗っていなければおかしい。

あのバーでは以前も酔いつぶれたことがある。あれはまだ麻子と付き合いはじめてすぐの頃で、おれはいつも奔放な彼女に振りまわされていた。彼女が別の男と並んで歩いているのを見て、おれはまさか遊ばれていたんじゃないだろうかと思っていたときだ。結果として、二股をかけられているというのは、おれの勘違いだったわけだが、あのときも死ぬほど酒を飲み、意識を失い、マスターにタクシー代まで払ってもらったのだ。

もしかしたら、おれはマスターに声もかけず、支払いもせず、勝手に出てしまったのかもしれない。だとしたら、本当に申し訳ない。おれの中でマスターに対する罪悪感が膨れあがる。と同時に、彼に対する怒りが再び首をもたげた。

彼というのは、もちろん麻子が命を落とすきっかけを作った男だ。名前は知らない。

彼は鳶職人だ。彼が駅前のビルの補修を始めたのは、三週間ほど前からだ。

八階建てのビルの五階と六階は、あるカラオケボックスのチェーン店が入っていて、そのビルに「火事だー」という悲鳴が上がったのは夜中の四時を回った、ほとんど明け方に近い時間帯だったという。発火の原因は未成年の喫っていた煙草だ。どうして未成年であると分かったと言うと、事件が報じられた直後は明かされていた名前が、やがてK君に変わったからだ。K君の本

名は覚えていない。その必要がないからだ。確かにK君は間接的な意味で麻子を殺したと言えるが、K君のせいで麻子が死んだとおれが騒ぎ立てるのは牽強附会に過ぎる。だからK君の本名が何かなんて、おれには関係ない。

彼が登場するのは、焼けてしまった六階を修理するという段になってからだ。もし、あのビルの持ち主が、あのビルを修復せず、更地にするなどの決定をしていたら麻子の運命は変わっていたかもしれない。もしくは、そんなことに関係なく、運命は麻子は殺していたかもしれないが、それはおれには分からないことだ。

二週間ほどをかけてビルをいかにして元通りにするか計画が練られたらしい。彼が登場するのは、火事が発生してから二週間半が経ったころだ。彼が現場に配属されてから三日目、彼は不注意で、足元の角材を蹴っ飛ばしてしまう。角材はなにもない虚空に押しだされ、その後は重力に引き寄せられるようにして落下した。そして残念なことに、本当に残念なことに、角材は地面にそのまま激突すればいいものを、その手前に立っていた麻子に激突することになった。重力に怨みはない、角材にも怨みはない。しかし、どうすればおれは彼に怨みを抱かずにいられるだろうか。ましてや彼は、そのとき酔っていたというのだ。不注意、とは笑える表現だ。おれは思わず笑ってしまう。彼は酔っていた、酔って足元が不覚になっていた、そこに角材があることに、それを少しでも蹴れば下にいる人の命が危険に晒されるということが分からないほどに、彼は何も考えていなかったのだろう、その酩酊がいかなる悲劇を起こすか、その悲劇によって彼がどれほど怨まれ、殺されることになるか。

殺される？

突如、思考のなかに表れた不穏な言葉におれは立ちどまる。

ううっ。歩みを止めたら急に頭が痛みはじめた。いや、もしかしたらおれはずっと頭痛に苛まされていたのかもしれない。足を止めることで、脳に余裕が生まれたから気づくことができただけで、おれは本当はずっと頭痛に襲われていたのかもしれない。ああ、それにしても、のどが渴いた。運よく近くに自動販売機があった。おれは財布から小銭を取りだして、缶コーヒーを買おうとする。しかし、上手く小銭が入らない。入らないどころか手元が狂って、小銭を取り落としてしまう。

ああ、拾うために屈むのも面倒だ。おれは財布をまさぐって新しく小銭を出そうとしたが、残っているのは一円や五円ばかりだった。しかたなく千円札を取りだす。スムーズに入らないかもしれないという不安が生まれるが「お札ならおいしくいただきます」とでも言うかのように、自動販売機はおれの千円札を滑らかに飲みこんだ。おれはブラックコーヒーを買うべく点滅しているボタンを押しこむ。ガコン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン。

おれは屈みこんで、缶コーヒーを手にとり、釣り銭を受けとり、ついでに先ほど落とした小銭を拾った。そのときだ。おれは気がついた。

なんだこの汚れは……？

袖が汚れていた。ネズミ色のコートが、袖の部分だけ黒く染まっているのだ。手を洗うときに誤って水につけてしまったのだろうか。しかし、バーにいる間、手洗いに立った覚えはない。

触れてみると、コートの毛がぱりぱりに立っていた。こすってみると汚れはぱさぱさと落ちた

。たった今、汚れを落としたばかりの指先を見つめる。黒く、いや赤く、かな。自動販売機が放つ明かりを見ながらおれは首を傾げる。

おれはすぐに気がついた。これが血液であることに。おれはコートの袖に他人の血を付着させていたのだ。どうして、コートの袖に他人の血がついているか、それはおれが殺したからだ。彼を。彼……彼、とは誰だろう。おれは缶コーヒーのプルタブを引き、どす黒い液体をのどに流しこんだ。苦さと熱がおれの脳を白く染めあげ、おれは苦悶するが、その苦悶は同時におれの記憶を鮮明にもした。

そう、彼が殺されるはずはないのだ。何故なら彼は、怨まれていない。いや、酔っ払った彼は角材を蹴っ飛ばして、人をひとり殺したのだ。確実に誰かに怨まれてはいるだろう。しかし、少なくともそれはおれに、ではない。おれはむしろ、そう彼に感謝している。よくやってくれた、と。よくあいつを殺してくれた、と。

あいつこそ、あの日、麻子と一緒に歩いていた男だ。やはりおれは疑いを捨てきれない。麻子が持っていた見覚えのないネックレス。「前から持っていたのよ」と麻子は言ったが、そんなことはない。おれは麻子が持っているアクセサリのすべてを把握してる。あいつが、あの日、麻子と並んで歩いていたあの男が、麻子に買って与えたに違いないのだ。だからおれは彼に感謝している。あいつを殺してくれた彼に。

ああ、そうだ。飲み終えた缶コーヒーを投げ捨てながら、おれはもうひとり感謝すべき男を思いだしていた。いや、彼を男と表現するのは語弊がある、まだ少年と呼ぶべきだろう。何故なら彼はまだ未成年なのだから。そう、K君のことだ。おれはK君にも感謝している。確かにK君がやったことはけして誉められたことではない。未成年にも関わらず煙草を喫い、何人かの友人とともにカラオケボックスで夜を過ごしたこと。煙草の不始末が原因で火事を起こし、避難できなかった他の客を死なせてしまったこと。彼の行為はけして誉められることではない、多くの人の怨みを彼は買ったことだろう。しかし、私は、あるいは私だけは感謝している。素晴らしいと思う。

だから私は拍手した。

他に誰もいない路地に拍手の乾いた音が響く。

出来ることなら「よくやってくれた！」とK君の肩を叩いてあげたい。何故なら、彼は間接的にはあるが麻子を殺してくれたのだから。あの夜、麻子はあのカラオケボックスにいたのだ。一番、奥まった脱出しにくい個室に、麻子はあいつと一緒にいた。本当はあいつもあの火事で焼け死んでくれれば良かったのだ。しかし残念なことに、火事が発覚したとき、あいつは入り口の近くで煙草を買い求めており、「火事だー！」という叫び声があがるや否や、あいつは麻子のことを放り出して逃げだした。

そう、敢えておれがK君に言うことがあるとするならば、あいつのことも一緒に殺してくれれば良かったと言うことだ。まあ、あいつは彼に殺させたからもう何もかも解決だが。

誰もいない夜の道、おれはコートの袖に目を向け、マスターには本当に悪いことをしたと思う。あんなことをするつもりはなかったのだ。マスターには感謝している、麻子が実は悪い女であることを教えてくれたマスターには。しかし、あのときのおれは夢中だった。麻子がそんな女だ

なんて思いもしなかったのだ。興奮していたおれは目の前にあった酒瓶を掴み、それを壁に叩きつけて、残った部分をマスターののど元に突きたててしまったのだ。

今でもあの生々しい感触は記憶に残っている。マスターの驚いたような顔、不思議な手ごたえ、血しぶき、紅に染まるおれの右手。マスターには本当に申し訳ないことをした。できることなら謝りたい。申し訳なかったと頭を下げたい。

――しかし、それはできない相談だ。

突然、誰かがおれの耳もとで囁いた。

「どうしてだ？」

おれは反射的に問いかけたが返事はなかった。

空耳だったのだろうか。

いつの間にかおれは、自分の部屋の前に来ていた。空き缶を放りすて、ポケットの中に手をいれて鍵を探す。しかし、指先になにかが触れる気配はない。どこかに鍵を落としてきてしまったのだろうか。

この寒空のした、おれは部屋の中に入れぬのか……。

絶望がおれの胸を少しだけ染めたが、ドアノブを回そうと試みたところ。

がちゃり。

扉はあっさりと開いた。

運がいいな。どうやらおれは鍵を閉め忘れていたようだ。

靴を脱いでキッチンに向かう。流しに置きっぱなしにしていたコップで、水を少しだけ飲む。靄がかかっていたような意識が少しだけ明晰になる。それに伴ない、ぎしぎしとロープが音を立てているのが癪に障った。

ああ、まったく、どうかしている。おれはコップを流しに戻した。その手は、K君のものでも、彼のものでもなかった。おれはいつの間にか、おれに戻っていた。いや、それは表現としては正しくないな。正確には戻りつつある、と言ったところか。

振り返って、寢室に続く扉を見る。

おれはその扉を開け、戻らなくてはならない。

床が冷たい。

ぎしぎしという音が増大する。

おれはそっと扉を開けた。

薄暗い、室内の中。おれはそっと微笑む。

思い残すことは、もうない。

見上げるとおれは笑っていた。

All imperfect love song is over long long time ago

<http://p.booklog.jp/book/42258>

著者：秋山真琴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/unjyoukairou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42258>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42258>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.